

森鷗外と仏教

大正大学大学院 文学研究科 国文学専攻 岩谷泰之

本論文は森鷗外と仏教の関わりに焦点を当て、当時の社会状況および鷗外の実生活を踏まえ、それらが作品にどのような影響をおよぼしているのかを考察したものである。目次は以下の通りである。

序章

第一部 鷗外と仏教のかかわり

第一章 亀井茲監を中心に

第二章 『大日本統藏経』を中心に

第三章 「諦念」を中心に

第四章 帝室博物館総長時代を中心に

第二部 鷗外作品における仏教

第一章 「日蓮聖人辻説法」論

第二章 「独身」論

第三章 「里芋の芽と不動の目」論

第四章 「普請中」論

第五章 「ル・パルナス・アンビユラン」論

第六章 「寒山拾得縁起」論

結章

鷗外は文久二年（一八六二）に生まれ、大正十一年（一九二二）に没したが、その生涯は明治元年（一八六八）から始まる日本の近代化と共にあったと言える作家である。

王政復古の大号令と共に発足した明治新政府は、天皇を核とした神道を国の中心に据えるため、発足直後から神仏習合を解くための神仏分離令と総称される布告を矢継ぎ早に出した。その結果、廃仏毀釈と呼ばれる仏像や經典等の破壊が全国的に起こった。明治以前は幕府によって保護されていた仏教は力を失い、僧侶は国民に対し尊王愛国思想を説く教導職に組み込まれた。

しかし、神道を国家の中心とする政府の宗教政策は、諸外国における「信教の自由」「政教分離」などの影響や、日本におけるキリスト教の取り扱いに対する欧米の批判から、修正を余儀なくされ、神社を中心とした神道は宗教ではないという方針に転換された。

このような明治政府の政策により、明治以前の信仰は破壊され、日本人における宗教観は急激な変化を強いられた。そして新聞や雑誌では、宗教家以外からも宗教の重要性が声高に叫ばれた。

こうした当時の社会状況の中で、鷗外は官吏・軍人として人生を送り、陸軍退任後も宮内省図書寮図書頭および帝室博物館総長を務めた。そのため鷗外は、亡くなるまで国家を運営

する側にいた作家であると言える。本論文はそのような鷗外が、宗教をどのように考え、仏教とどのように関わり、そして作品でどのように表現したのかを追及した。

まず序章では、当時の宗教をめぐる社会状況および鷗外と仏教についての先行研究を整理し、研究の現状における問題を指摘した。

先行研究において鷗外と仏教の関係を論じたものは主に小倉時代におけるものである。

鷗外は明治三二年（一八九九）六月から約三年間を福岡の小倉で過ごし、その際に曹洞宗の僧・玉水俊ゆづに唯識論を学んだ。その影響については明治四三年（一九一〇）に発表した戯曲「生田川」で唯識論に関する仏典が引用されているということ等が研究されてきた。

鷗外と仏教に関する研究が小倉時代に集中している理由は、小倉で「玉水俊ゆづ」に「唯識論」を学んだという事実が日記や書簡をもとに明らかにされ、その影響が「生田川」に見られることが明確であるからだと考えられる。

その一方で、小倉時代以外のことはまだ明らかにされていないという研究の現状が、鷗外と仏教との関わりは小倉時代のみにおける限定的なものだという見方を強めていると言える。そのため本論文の第一部では、小倉時代以外における鷗外の実生活と仏教との関係を追及した。

第一章では、鷗外が生まれ育った津和野の藩主・亀井茲監これみに焦点を当てた。

森家は代々亀井家の典医であり、その関わりも密接であった。茲監は国学に傾倒し、明治以前から藩内で仏教弾圧を行った。明治政府はそのような茲監に宗教政策における重要なポストを与え、責任者の一人とした。神仏分離令も茲監らの草案によるものであった。

鷗外は、このような茲監によつて仏教が排斥された津和野の藩校で教養を培った。しかし上京後、自らの意思で仏教を学んでいく。

第二章では、鷗外の旧蔵書に収められている仏典の叢書「大蔵経」に焦点を当てた。

鷗外は『日本校訂大蔵経』を全国で十七番目の早さで予約購入していたということが、刊行元の機関誌から明らかになった。そして鷗外は、その続編に当たる『大日本統蔵経』刊行という事業に、評議員という立場で参加した。このことは新聞や雑誌の広告を通じて広く世の中へ伝えられていた。この評議員は約四十名おり、明治政府の宗教政策に反発してきた僧侶等と共に鷗外はその名を連ねることになった。

そして鷗外は評議員として積極的に『大日本統蔵経』刊行を助力したと考えられる。これまで先行研究では戯曲「生田川」が、俊ゆづに唯識論を学んでから十年の歳月を経て発表されたことについて、その理由が追及されてこなかった。しかし「生田川」発表時は、立て続けに『大日本統蔵経』に唯識論についての経典が収録され刊行が行われている時期であった。また、『大日本統蔵経』の広告の一部では、作家に対して多くの素材を提供することになるだろうということが謳われていた。そのため鷗外は評議員として、『大日本統蔵経』を素材としたような作品を発表したと考えられる。

第三章では、鷗外が繰り返し使用した「諦念」という言葉に焦点を当てた。

鷗外研究において「諦念」は鷗外の心境を分析する際のキーワードとして頻繁に用いられるが、その典拠は不明であるとされた。

初期の使用方法は主に「諦念」に「あきらめ」とルビを振ったものだが、鷗外の弟が編集を務めた雑誌『歌舞伎新報』から、同様の表現を見つけることができた。

その一方で、「諦念」は仏典で用いられた言葉であるということを明らかにした。鷗外は『日本校訂大藏経』『大日本統藏経』刊行が終わった後に、「諦念」を「あきらめ」と読ませるのではなく、ゲーテに関する著書の翻訳で、訳語として用いている。大藏経に触れる中で、「諦念」が仏教の言葉であることに気付いたのではないかと考えられる。鷗外はこれまでも仏教と西洋の哲学とを対置するような表現を行ってきたが、仏教によって西洋哲学を相対化したのではないかと考えられる。

第四章では、大正六年（一九一七）から亡くなる大正十一年（一九二二）までの、陸軍を辞した後に就いた帝室博物館総長の時期に焦点を当てた。

この時期に鷗外は帝室博物館に所蔵されていた、漢訳仏典の辞書に当たる玄応撰『一切経音義』を学界のために出版しようと考えた。そして『一切経音義』の索引作成を国語学者・山田孝雄に依頼した。しかし、この帝室博物館所蔵版はいくつかの欠損が存在した。鷗外はそれを補うために、正倉院に収められた「聖語藏経卷」の中から補填部分を発見した。またその際に、題目不明であった経典が『一切経音義』の一部であることも明らかにしている。このように最晩年においても鷗外は仏教と関わり続けたのである。

次に第二部では第一部を踏まえて作品の分析を行い、鷗外が仏教をどのように表現しているかを分析した。

第一章では、明治三十七年（一九〇四）三月発表の「日蓮聖人辻説法」に焦点を当てた。作品発表の時期に、当時の山縣有朋内閣は仏教やキリスト教などを等しく「宗教」として取り扱い、規制をするために「宗教法案」を国会に提出した。それに対して仏教界は総力をあげて反発し、結果的に法案は否決された。そうした問題のもとで政府は僧侶の街頭での演説を「治安警察法」によって取り締まった。鷗外はそうしたことを作品で批判的に表現しているのだと分析した。

第二章では、明治四三年（一九一〇）一月発表の作品「独身」に焦点を当てた。この作品では主人公の、科学者も「三宝さんぼうに帰依してゐる」や「仏法などを攻撃しはじめたのは誰だらう」という言葉の背景にある問題を、鷗外の旧蔵書に収められた村上専精せんしやう『俱舎論達意』（哲学書院、明治三五年）や、当時刊行されていた加藤弘之『吾国体と基督教』（金港堂、明治四〇年）を対応させて分析した。その結果として、加藤弘之が仏教を迷信だと批判したことに対し、仏教を自然科学と同様だと説いた村上の論を肯定的に描いているのだと結論付けた。

第三章では、明治四三年（一九一〇）二月発表の「里芋の芽と不動の目」に焦点を当てた。この作品では仏典に記されている不動明王の特徴が、主人公に重ねて描かれているということを考察した。また江戸期に隆盛を誇り、明治に入って衰退した広徳寺を描いたことで、鷗外は廃仏毀釈を表現しているのだと分析した。

第四章では、明治四三年（一九一〇）六月に発表された「普請中」に焦点を当てた。この作品における「某大教正の描いた神代文字」という表現に着目し、教導職が廃止されてから二十年以上が経ったこの時期に、作品で教導職について触れたことの意味を分析した。その結果として当時、明治天皇より出された「戊申詔書」の内容を僧侶等が説かなければならないという状態が、教導職と重ねられているのだと考察した。

また主人公のドイツに滞在した過去を持つ「参事官」という設定や、「日本は芸術の国で

はない」という言葉から、当時の内務省参事官・水野鍊太郎がモデルとされているのではないかと分析した。水野鍊太郎は鷗外と著作権法制定等で意見を同じくする一方で、神祇行政と深く関わりのあった人物である。明治三十三年（一九〇〇）まで、神道や仏教等に関する行政を内務省社寺局が担っていた。しかし水野が中心となり、神道や神職については「神社局」、それ以外の仏教やキリスト教等の取り扱いを「宗教局」で行うように分離がなされた。

その結果、仏教界は「宗教局」から「戊申詔書」を国民に説くように指示されることとなった。鷗外は「普請中」で様々な社会問題を描いていると考えられるが、その一つとして、水野をモデルに用い、当時の宗教の状況を反映させたのだと考察した。

第五章では、「普請中」と同月発表の「ル・パルナス・アンビュラン」に焦点を当てた。この作品は作家の葬式を描いたものだが、鷗外は葬式と商売が結びついた当時の世相を批判的に表現していると考えられる。これまで仏教を肯定的に描いてきた鷗外だが、この作品では職業的に葬式を行う僧侶も批判の対象とされている。

そのため、これまで明治政府の宗教政策に抵抗してきた仏教界が、再び教導職と同様に「戊申詔書」を説いたことに対しても批判的であったのではないかと考えられる。また鷗外の仏教界に対する批判が決定的となったのは、この時期に大逆事件が起こり、三名の僧侶が逮捕され、各宗派が早急にその僧侶等を除籍したことにあったのではないかと考えられる。鷗外はこの時期に、大逆事件における政府や世間の対応を批判する作品を矢継ぎ早に発表している。そのため政府に迎合し、僧侶等を切り捨てたことに対して批判的であったのではないかと考えられる。

第六章では、大正五年（一九一六）一月発表の「寒山拾得」における「縁起」に焦点を当てた。「縁起」では鷗外が娘に「実はパパも文殊なのだ」と言ったと記されているのだがその意味は説明されていない。「縁起」では当時神仏を自称していた宮崎虎之助が描かれており、彼と共に鷗外も仏を名乗ることで、仏教・神道・キリスト教等の関係者が集まり結成された「帰一協会」の目指す宗教教育への批判となっているのではないかと結論付けた。

帰一協会は三教会同が発足の基になっている。三教会同は、大逆事件等により、世の中を静めることができない政府が、仏教・キリスト教・教派神道等に呼びかけ、協力を要請したものであった。このような政府に迎合する仏教界を鷗外は批判的に描いているのではないかと考えられる。また「寒山拾得」自体でも、真の信仰心は為政者の手の届かないものとして描かれている。警察に追われながら自らの信仰を説いた宮崎虎之助を鷗外は何度も家に招いていることから、社会状況に左右されず信仰を貫く宗教家に対する敬意があったのではないかと考えられる。

それは、鷗外が妹に宛てた手紙で儒教や仏教から「道」というものを学ぶべきだと記したことにも表れている。鷗外は妹に対し、儒教や仏教を学べば「人は何のために世にあり、何事をなして好きかといふこと」を考えようになると説明する。そして自らの考えを持つようになれば「儒を聞いて儒を疑ひ、仏を聞いて仏を疑ひても好し。疑へばいつか其疑の解くことあり、それが道がわかるといふもの」だと記している。そのため鷗外にとって仏教や宗教と対峙することは、人は何のために何をして生きるべきなのかという、自身の「道」に対する考えを見つめることであつたのだと考えられる。

以上のように、作品においては仏教が全て肯定的に描かれているわけではないと考えられる。鷗外は作品内で仏教を排斥する宗教政策を批判したが、そのような政府に迎合する仏

教界や、葬式における商売と仏教が結びついていく様子もまた批判的に描いている。そのため鷗外は明治という時代の中でそのあり方が大きく変質していく仏教界を作品に描き続けたと言うこともできるであろう。

その一方で、鷗外は漢訳仏典を総集した大藏経を手元に置き、その音義書の索引を求め、最晩年まで仏教を学んだ。そのため日本に受け継がれてきた学問として仏教を重要視し続けたのだと考えられる。それは鷗外が西洋の哲学や宗教を相対化するものが、東洋における仏教だと考えていたからだと考えられる。「諦念」を訳語に用いたことからそれだろうかといわれる。鷗外は随筆「鼎軒先生」で「東西両洋の文化を一本ずつの足で踏まえている学者」は「最も得難い」人材であると述べた。しかし、鷗外自身がその「最も得難い」人物であったのである。このように考えたとき、「人は何のために世にあり、何事をなして好きか」と考え続けた鷗外は、最後まで学問のために生きてと言える。そして、そのような自らの「道」に対する考えを、仏教と対峙することで見つめたのである。

鷗外の西洋に対する知識と理解は、アンデルセンの『即興詩人』、ゲーテの『ファウスト』、欧州の同時代作家の短篇を訳した『諸国物語』に代表される数多くの翻訳作品や、また、欧州のニュースを翻訳して伝えた「椋鳥通信」によって明白である。

その上で、仏教に対する深い知識と理解が、同時代ひいては後代の近代作家と一線を画しているところが特筆すべき点であり、それが鷗外の文学の本質と関わり、彼の文学を唯一無二の文学としているのである。